

お稽古が教えてくれたこと

京都女子高等学校二年（京都府）

谷口 遥香

私は茶道歴四年になる。この度、七夕茶会で初めて御正客を務めた。とても難しく、緊張もしたし、全くうまくできなかつた。お茶室に入る。掛け軸やお花を拝見する。お道具を拝見して、質問する。お点前の方やお客さん同士で挨拶する。いつものお稽古と同じはずなのに、できない。それは、御正客だからだ。全て御正客中心で、御正客が初めに動かなければならない。いつもはなんとなく周りの人がしているようにお茶を服し、お菓子をいただいていたため、できている気がしていた。しかし、実際に自分一人で動いてみるとあやふやなことが多く、難しかった。先生の助けをいただいで、どうにか乗り切れた。お客さん役でも厳しいものだから、お点前や亭主役ならばなおのこと、お茶室に何のお道具から運ぶのかもおぼつかないだろう。

日頃のお稽古態度を振り返ってみる。いつも先生に教えてもらいながらお点前をしていくので、自分から動くことや、絶対覚えなさいといけないとか、できないと困るとか、そういう意識は全くなかつた。私はそれに甘えてしまっていたのかもしれない。何事も上達するには自主的な稽古は必須だ。もっと主体的にならなければと反省しながら、氣付いたことがある。私は今高校二年生で、進路のことを考えつつ毎日を過ごしている。しかし、いろいろ迷って決められない。いろんなことに挑戦してきたつもりだが、きっかけは人に誘われたり、勧められたりしたことだ。どんなことも言われて初めて取り組むような性格だから、はっきりとこれになりたい、この道に進みたいという目標が見えてこなかつたのだろうか。どこか受け身な姿勢なのだ。その姿勢はお茶のお稽古でも同じだったのだと思う。だから茶道歴四年でも、自分から動けなかつたのだと思う。自分の進路は自分でしっかり考えないと見えてこない。誰かが正解を教えてくれるものではないからだ。お茶のことを考えながら、今の自分に足りないものや目指すものに気付いた。

自分の御正客役に反省ばかりの私だったが、良いところもあると思いたい。助言を素直に聞いたり、人の所作を見たりしているところだ。学ぶは「まねぶ」で真似ること、習うも「倣う」に通じる。だから何事かを身に付けたいと

きは素直に教えを乞うことも大切だと思う。あやふやをこまかすのは駄目だが、よく見て聞くことは役に立つと思う。お点前や所作を覚えることはもちろん大切だが、できないことを認められる自分、助言を求められる自分、自分に素直になれるきっかけをくれることも、またお茶のお稽古の魅力の一つだ。お道具やお花を見て、お菓子をいただいて、お茶を飲んで楽しむ。そして自分を見つめ直す。毎日忙しく慌てている私にとってはお茶の時間はとても貴重なものだ。まずは楽しんで、それに加えてたくさんのお点前ができるようになったり、しっかりとした作法が身に付いたりするよう有意義な時間にしていきたい。お稽古というものは、うまくいかなくてもいろいろなことを考えさせてくれる大切なのだと実感した、今回の御正客だった。